



NPO法人
ヒマラヤ保全協会

IHC-JAPAN: The Institute for
Himalayan Conservation Japan

ネパール・ヒマラヤと日本をつなぐ会報誌「シャングリラ」

Shangri-la

シャングリラ



2024年度
現地活動報告



100円でヒマラヤに1本の を植えよう!

One coin One tree on Himalayan, tomorrow will be in your hands.

現 地 報 告

IHC 会長
京都大学 特定准教授
相馬 拓也

ヒマラヤ保全協会と川喜田二郎の 50 年間を振り返る

ヒマラヤ保全協会は、2024 年に活動開始から 50 周年の節目を迎えました。今回は、ときに正論で、ときに奇抜でもあった「川喜田式アクション＝リサーチ」の、多様な事業の系譜をたどってみたいと思います。

本会は川喜田二郎先生（図 1）が 1974 年 7 月に設立した、「ヒマラヤ技術協力会」（ATCHA）を前身として、1993 年に ATCHA とキング・マヘンドラ・トラストが合併する形で誕生しました。初代会長には、外務大臣や JBIC 総裁などを歴任した大来佐武郎（1914 年～1993 年、1971 年にマグサイサイ賞受賞）を会長に迎えて発足しました（図 2）。

はじめに、川喜田先生はヒマラヤ保全協会につながる活動の動機を次のように語っていました。

「この動機の半分はヒマラヤの土地と人々へのわたしの愛情である」

『川喜田二郎著作集 (9)』p.295

その活動は紆余曲折ありながらも、ネパールを中心に半世紀にわたり、国土緑化と国際技術協力を続けてきました。そして、その活動の根底の哲学を次のように言い表していました。

「現世と感動的につきあう能力を、回復しなければならない。

『世界を悩む』これが中核の思想である」

ヒマラヤ保全協会．1992.『第 1 回山岳エコロジースクール報告書』p.8

そして、「ヒマラヤでの仕事は語りつぎ言い継ぎゆかん、である。（中略）近頃はやりの自己実現などを最高の価値にしてはいない」とも言い表して、活動の形骸化や理想の空洞化に懸念を示していました。

本会の活動の原点は 1974 年のシーカ谷での《簡易水道とワイヤー軽架線の設置 (P&P)》から始まりました（図 3）。その後も、自然力揚水ポンプの設置や、架橋などのインフラ整備に加え、国際総合山岳開発センター（ICIMOD）の設立提言をネパール政府と UNESCO にも送りました。90 年代には、1992 年 3 月に第 1 回《山岳エコロジースクール (MES)》の開催や、1994 年 2 月 13 日に国際ロータリークラブと共同でムスタンのジョムソム村に「地域開発センター」《ムスタン・エコミュージアム》を開設（図 4）するなど、新規性の高い事業で一般参加者への門戸を開き、積極的に環境教育などにも取り組むようになりました。2000 年代には、川喜田先生の最後の仕事、パウダル村でのチーズ工房開設（図 5）に始まり、森林保全や果樹栽培によるアグロフォレストリー（図 6～7）、女性のエンパワメントを目指した機織り工房と紙漉き工房の設営（図 8）を実践しています。そして、昨年からは桜苗の植栽によるフラワー・ランドスケープ創成を開始し、地域の人々が求めるニーズに柔軟に対応した活動を展開しています。

こうした活動を振り返ると、川喜田先生の理想と思想の最奥にあったものとは青臭い人間味であり、その活動の根源とは、まさに《人間賛歌》そのものであったということが出来るのです。これからもニンゲン・川喜田二郎の理想を受け継ぎつつ、ヒマラヤ保全協会も邁進していきたいと思います！

川喜田二郎 略歴



KJ法

移動大学

ヒマラヤ保全協会の設立

野外科学の方法

研究成果の視覚化
メディア戦略



▲シーカフのロープライン完成直後で語る川喜田二郎先生（1975年2月撮影）



▲ネパールで活動する生前の川喜田二郎先生（1975年撮影）



▲筑波大学での最終講義（1984年2月17日）



▲書籍とオリジナル映像作品

川喜田 二郎（1920～2009）
日本の地理学者、文化人類学者

図 1

ヒマラヤ保全協会の歩み

【ヒマラヤ保全協会 設立趣意】

「日本勢の総結集をし、お金のある向きはお金で、身体のある人は身体で、知恵や知識のある人はその知恵や知識で、と訴えたい」

川喜田 二郎、1990、日本勢の総結集を目指す、ヒマラヤ保全協会の構想、PRAKRITI vol.2 no.1; p.5.



大来 佐武郎
マガサイサイ賞 1971年受賞

初代：大来 佐武郎（1989～1993） [元・外務大臣／元JBIC総裁など]

2代目：川喜田 二郎（1993～2003） [東京工業大学・筑波大学教授]

3代目：水野 正己（2003～2013） [日本大学・教授]

4代目：渡邊 敏雄（2014～2016）

5代目：相馬 拓也（2016～）



川喜田 二郎
マガサイサイ賞 1984年受賞

図 2

ヒマラヤ保全協会の歩み

1970年～1977年



▲この5年間に実用機が18基稼働した



▲HICバンプラインの敷設により、はじめて水道が引かれた村は多い



▲ポンプへの4mの落差で約200mを揚水可能



▲架橋

1978年

ICIMOD設立の提言



1979年

自然力渡河ボート



▲ネパール・RONSATとの共同プロジェクト、度重なる騒音と財政難から事業は中止した

1985年～

山岳コロニアルスクール



▲例年12月～翌1月、まで開催し、参加者30名、総収入が1,000万円を越える社会事業となる

1989年～

アンダブル総合環境保全会



▲現在のHIC環境保全活動の原型となる事業の開始

図 3

ジウムソム地域開発センター

ムスタン・エコミュージアムの開設

1994年3月～

【沿革】

ムスタン王国への外国人入境解禁（91年10月）とともに計画・始動し、1994年3月に開館

【予算】

IHCおよびロータリークラブなどで総額2,000万円程度で建設・整備を実施した。



▲村人でにぎわう館内

図 4

パウダル村チーズ工場の設置

2002年～



▲村人から毎朝、牛乳を買い取って生産する。現在は毎日8頭の牛から約50kgのミルクを得ている



▲売上収入は2名のチーズ職人と、村内唯一の学校の設備や教師の賃金として補填される。

図 5

苗畑運営による稚幼木・果樹苗の生産

[2017年～]



▲サリヤ村のナーサリー。年間最大で10,000本の稚幼木を生産している。

図 6

果樹栽培のアグロフォレストリー

[2017年10月～バランジャ村]



▲キウイ栽培の協力農家さんを募集し、各戸10～15本を無償提供。栽培試験区でのマルチング（敷草）や実生苗の育苗にたずさわっていた（2016年4月）

▲レモンの栽培試験区では500株を植栽した（2019年4月／7月）

図 7

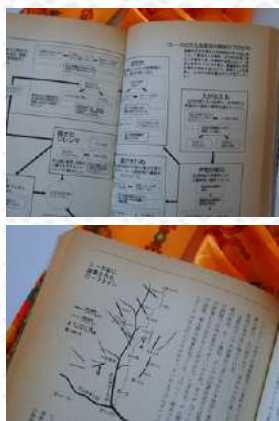
有用樹によるモノづくりと女性のエンパワメント

[2010年～]



▲紙漉き工房（サリジャ村） ※ネパールジンチョガによる紙づくり

図 8



『ヒマラヤに架ける夢』 川喜田二郎 編・著

川喜田二郎先生は、日本の地理学者・探検家であり、ネパールをはじめとする多くの地域でフィールドワークを行いました。著書『ヒマラヤに架ける夢』では、ヒマラヤ保全協会の活動の軌跡を現地の人々との交流を通じて得た深い洞察力や独自の発想法である「KJ法」に基づいた考察で示されています。簡易水道パイプラインや軽架線ロープラインを巡る活動記録は、現地の昔と今を繋ぐ貴重な資料であり、活動継続のための必読書です。

（記・稲田 喬晃）

現 地 報 告

特任研究員
高橋 輝行

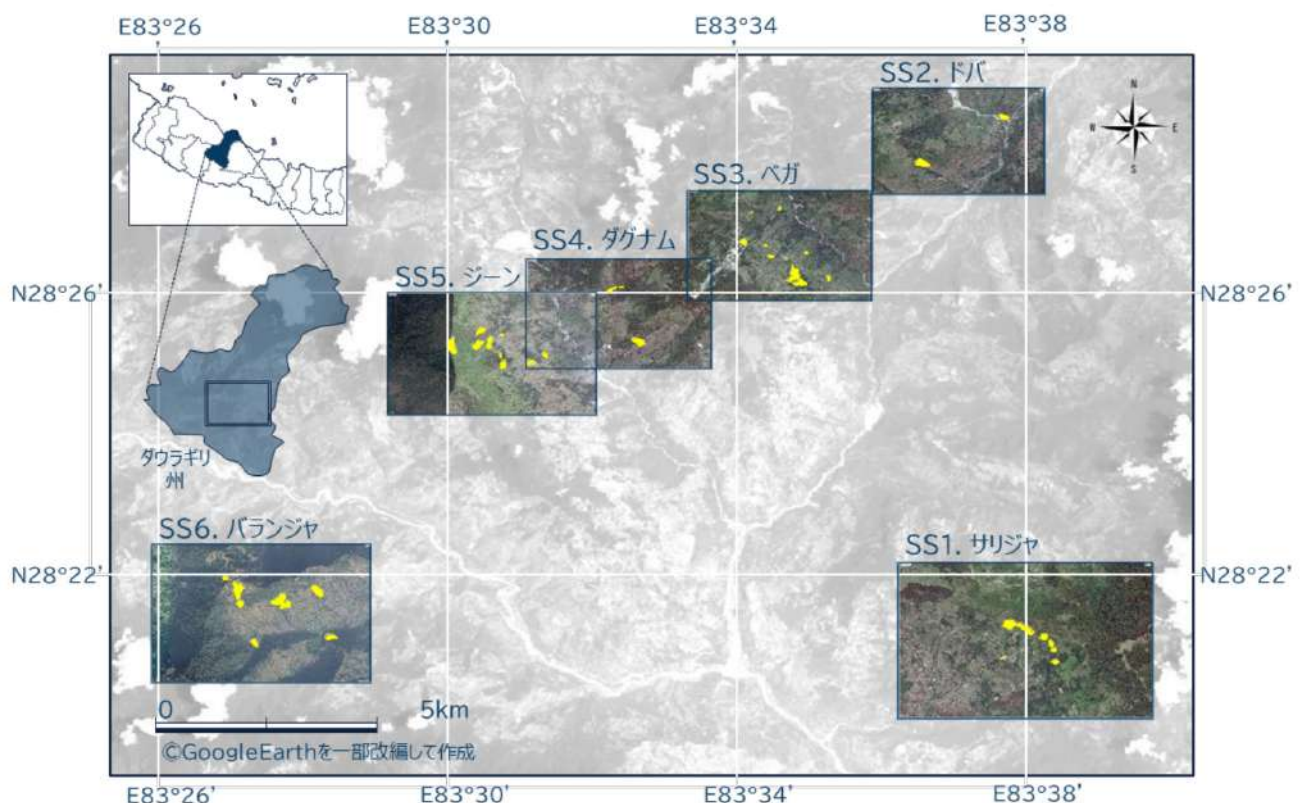
「生活林づくりを通した山村復興支援プロジェクト（2010 年～ 2015 年）」の 効果検証

本会は 2010 年から 2015 年にかけて、JICA 草の根技術協力事業 (JPP) (平成 22 年度第 1 回採択案件 1003654) 「生活林づくりを通した山村復興支援プロジェクト」(以下、当プロジェクト)を実施しました。当プロジェクトではカリガンダギ河流域の 6 ヲ村 63 地点において、約 23 万本、およそ 140 万㎡の植林を実施しました (相馬 2021)。

当プロジェクトの開始から約 15 年が経過したことから、現在、プロジェクトサイトの中期的な植生回復状況に関する定量評価研究を進めており、その成果の一部をご紹介します。

当プロジェクトは、ダウラギリ県ミャグディ郡およびパルバット郡の 6 村落 (サリジャ村、ドバ村、ベガコーラ村、ダグナム村、ジーン村、バランジャ村) で実施されました。各村落には計 68 カ所のプロジェクト事業区が存在しており、2015 年 5 ～ 10 月にかけて GPS 機器を用いた実測によって各事業区の境界データを取得しています (図 1)。

図 1 各プロジェクトサイトの位置 (相馬 2021 より)

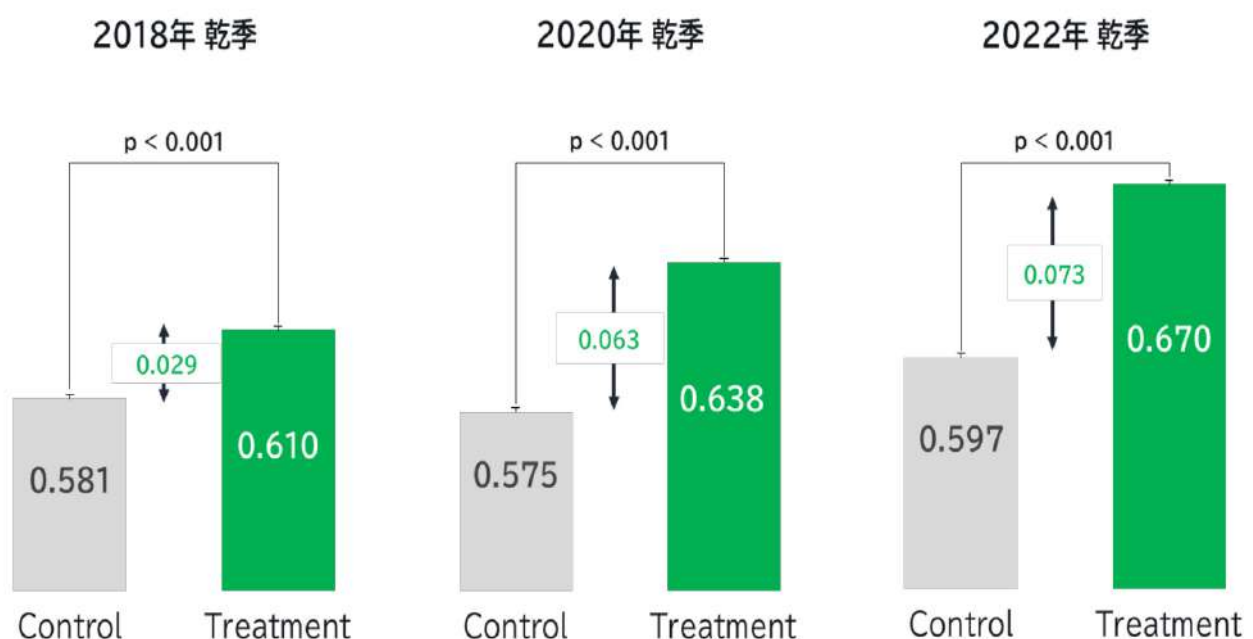


今回、植生を評価するデータとして、衛星画像から取得された正規化植生指数（NDVI）という指標を用いました。NDVIは植生の活性度を示す指標で、この値が大きいほど、地上の植生が多いことを意味します。

さらに本研究では、傾向スコアマッチングと呼ばれる統計学の手法を用いて、プロジェクトの実施されたエリアと実施されなかったエリアを比較する、疑似的な実験手法を採用しました。これは医学研究等で行われる対照実験を模した研究デザインであり、プロジェクトの効果検証を精密に行うことができます。

分析の結果、当プロジェクトが行われたエリアとそうでないエリアをでは、NDVIに有意な差が確認されました（図2）。この差は2018年～2022年にかけて、年を追うごとに拡大しており、当プロジェクトによる持続的な植生回復効果が確認されました。

図2 プロジェクトサイトによる植生回復効果の推定結果



本研究により、当会によるコミュニティ参加型の植林事業の有効性と持続性を、定量的に検証することができました。この研究成果は2024年日本地理学会春季学術大会で発表されており（高橋・相馬 2024）、今後は国際的な学術誌での発表を目指しています。

参考文献

相馬拓也 (2021): ネパール西部カリガンダキ溪谷遠隔農村部における生活林再生とアグロフォレストリーの国際協力．早稲田大学高等研究所紀要，13: 77-88

ネパール西部におけるコミュニティ参加型生活林再生事業のインパクト評価

高橋輝行・相馬拓也 (2024)：ネパール西部におけるコミュニティ参加型生活林再生事業のインパクト評価．2024年日本地理学会春季学術大会

事

務

局

だより

ヒマラヤ写真便り

撮影 稲田 喬晃

ヒマラヤ保全協会 50 周年記念事業として、サクラ・プロジェクトが始まりました。日本の桜苗をネパールに運び、ポカラのレイクサイドにある駒ヶ根友好公園とバシュンドラ公園に植樹しました。

長年における皆様のご支援ご協力のおかげで、たくさんの苗木をヒマラヤに植林することができました。これからも活動を継続していき、できる限り現地の方々と共に緑の絆を繋げていきます。

(右 写真)

(表紙写真: 記念植樹祭式典 ポカラ・バシュンドラ公園)



寄付で支援する

100 円で 1 本の木がヒマラヤに植えられます。

1 口 3,000 円から何口でも結構です。

右記の振込み先にご送金ください。

■ みずほ銀行新宿南口支店

普通 2005209

NPO 法人 ヒマラヤ保全協会

マンスリーサポーターになる

毎月 1,000 円からマンスリーサポーターになることができます。

マンスリーサポーターの皆様には、「活動報告書 & 計画書」年 1 回)をお送りします。

■ 郵便振替

00100-0-709154

※銀行振込みをご利用いただいた場合は、ご氏名（ふりがな）とご住所を、e-mail にてご連絡ください。

会員になる

年会費：個人会員 5,000 円・団体会員 30,000 円

会員の皆様には、現地の活動が盛りだくさんの

会報『シャングリラ (Shangri-la)』をお届けします。

詳しくは、NPO 法人ヒマラヤ保全協会のホームページをご覧ください。

100円で1本の木をヒマラヤに植えよう！ ご支援お待ちしております！

シャングリラ第 116 号 2025 年 2 月 20 日発行 編集・発行 NPO 法人 ヒマラヤ保全協会

TEL: 080-3570-8458

e-mail: ihcjpn@yahoo.co.jp

ホームページ: <http://www.ihc-japan.org>